

達成度 A：達成できた（8割以上） B：ほぼ達成できた（6～7割） C：あまり達成できなかった（4～5割） D：達成できなかった（3割以下）

自 己 評 価						学校関係者評価		次年度の課題
NO	項目	重点目標	具体的方策・指標・基準等	達成状況	達成度	成果○と課題●	意見・要望・評価	
1	学校経営	①コミュニケーションを大切にしたい学校経営を推進するとともに、生徒理解を基底に据えた教育活動を展開する。	○早期に学校生活に適応できるよう支援する。(1年) ○面談週間やホームルーム活動を活用し、生徒理解と生活実態の把握に努め、充実した学校生活を送れるよう配慮する。(1年・2年・3年) ○「GoogleClassroom」を中心とした「GoogleWorkspace」を全校生徒対象に導入し、各学年と連携しながらオンライン上での学習生活活動支援などを積極的に行う。(総合企画)	・概ね良好な学校生活を送ることができた。(1年) ・面談週間(3回)を行った。(2年) ・二者面談や三者面談を、生徒あたり平均5回以上実施した。(3年) ・全教室にプロジェクター及び電子黒板、クロームブックを配備し、「GoogleWorkspace」の諸機能を生かしたオンライン学習指導を行った。(総合企画)	B	○機に応じた面談活動とおして得た情報を、担任団全員で共有できた。(1年) ○各担任が生徒の進路志望、普段の生活、悩みなど、より深く理解することにつながった。(2年) ○生徒一人一人の状況に合わせて、面談週間以外にもきめ細やかに対応することができた。(3年) ●中位層の全体的意識の向上が上手くいかず、上位層が育たなかった。(3年) ○徐々にはあるが、Googleを使用した授業スタイルを構築する教員が増えつつある。また生徒側も、日常的にGoogleを使用する頻度が増えつつある。(総合企画) ●4月からの「1人1台端末」の導入が決定する中で、どのようにオンライン指導を推進するか。職員間での指導に関する合意形成が必要。(総合企画)	・学校経営について、重点目標に則した経営が十分になされていると感じる。 ・アンケート集計結果で、「入学して良かった」「雰囲気は良好」の項目で平均80点を超えており、概ね満足した学校生活ができていていると感じる。 ・ICTを様々な場面で活用する機会も増えてきており、教員と生徒、生徒同士など、授業やコミュニケーション手段として、今後どのように活用されていくのか大変興味を持っている。取り残される生徒が出ないよう配慮をお願いしたい。 ・学校でもコミュニケーションの大切さを指導していただくとありがたい。	・引き続き面談週間やICTを活用し、生徒に寄り添う丁寧な教育活動を行っていく。 ・家庭との綿密な連携を図るとともに、生徒に関する情報を職員間で共有し、組織としての生徒理解を進める。 ・生徒1人1台端末を活用することにより、生徒の個別最適・協働的な学びの充実及び緊急時の学びの環境構築を図る。
		②学級減に伴う教員定数や生徒数の減少、海外研修旅行の実施など、学校変革期における体制の整備と対応を万全に図る。	○担任会、各課会議、連絡協議会などを通じて、課題や問題点を共有し、解決策や代替案を検討する。(教務) ○2年理数科の「海外研修」について、より研修が深まる内容となるよう研究を進める。(理数)	・コロナ禍のため、海外研修が国内研修に変更された。(2年) ・各分掌で話し合われたことを共有し、事前に問題になりそうな事案について適切な処置を行うことができた。(教務) ・未実施(理数)	B	○中尊寺やねぶた、五稜郭など、国内の歴史・文化を改めて触れ、研修することができた。(2年) ○想定される問題点について、事前に担当者間で連絡と連携をとりながら進めることが出来た。(教務)	・Googleを使用したオンライン学習指導の活用など、新たな取組みで成果をあげつつあることは大変重要なことと思う。ICTを活用した教育・生活支援だけでなく、生徒の情報活用能力育成の観点からも、今後も継続して活用改善を図っていくことが大切だと思う。 ・コロナ禍で、研修旅行の実施が中止させる学校が多々ある中、2年生の研修旅行が実施できたことは、先生方のご努力の賜物であり、評価できる点である。 ・海外研修は続けてほしいと思う。多感な時期に一度外に出て、自分が「外国人」になってみれば、相互理解の感覚をつかめるのではないかと。生徒たちには、外から日本、山形を見られるように、ぜひ続けてほしい。	・職員定数減に伴い、校務分掌や部活動の見直しを進め、人員の適正配置に努める。 ・2学年の海外研修旅行の実施に向けて、コロナ禍の状況下における情報収集に努めながら、代替開催を含めた準備を遅滞なく進める。 ・校務支援システムと校内グループウェアの円滑な運用を進めるとともに、校務の負担軽減に努める。
		③教職員の「働き方改革」を推進するとともに、PTAや後援会、同窓会等、外部団体との連携を密にしながら学校の活性化を図る。	○「さくら連絡網」や学年通信の発行を通して生徒の学校生活と各種情報を提供し、保護者との連携を密にして共通理解を図る。(1年・3年) ○保護者と協同してPTA広報紙を発行したり、保護者のPTA行事への積極的参加を促すなど、保護者との連携を推進する。(総務) ○同窓会事務局との情報共有に努める。(総務)	・「さくら連絡網」や学年通信の発行を通して各種情報発信を行った。(1年) ・学年通信を2月現在で20号発行し、保護者に学校の様子を伝えることが出来た。(2年) ・日常的にさくら連絡網を活用した。学年通信を13号発行した。(3年) ・PTA広報誌「南高だより」は、コロナ禍で会議の運営や内容の変更を余儀なくされたが、予定通り2回発行できる見通しが立った。PTA活動は制限されたが、学年ごとにPTA行事が行われたりと、コロナ禍の中でも保護者との連携を図ることができた。(総務)	B	●対面による機会が減少し、情報発信に対する反応が乏しい。(1年) ○学校での様子を伝えることができたが、一方的なものであるため、十分保護者の声が届いているとは言えない。(2年) ○さくら連絡網は、生徒を介さず直接保護者と繋がるため、重要な連絡が届かないことがなくなった。コロナ禍で直接保護者と会う機会が少なくなった中、こまめな連絡が可能であった。(3年) ○出欠等の取りまとめもスムーズで担任との連携が密になった。(3年) ●この状態が続くような場合に、保護者との連携を今後どのように図っていったらいいのかオンライン配信等も含めて検討が必要。(総務)	・通常の学校生活が望めないコロナ禍の状況や新たなオンライン授業の準備など、教職員にとって益々仕事が増える状況にあり、働き方改革の推進は、各位の努力だけでは解決できない状況と思う。学校経営全体として、さらに改善策を模索し要望していく必要があると思う。 ・先生方が体調を崩されると困るので、忙しいとは思いますが時間を調整し、十分な休養とプライベートの時間を大切にしてほしい。 ・保護者向けの説明会や面談の実施が難しく、学校との保護者のつながりが希薄となっており、保護者が学ぶ機会が減ってきているのではないかと。進学を含めたキャリアデザインを親子で考える3年間だと思つので、Webでの保護者説明会開催などICTを活用し、保護者も共に学ぶ機会を創出することも有効な手段ではないだろうか。	・学校から発信する情報が保護者に迅速かつ確実に届くように、さくら連絡網やホームページを有効活用する。 ・保護者からの学校や教職員への電話連絡については、さくら連絡網や留守番電話(非常用携帯電話)を活用し、教職員の負担軽減をさらに促進していく。 ・コロナ禍の状況を見極めながら臨機応変な手段により、外部団体との連携を密にする。また、引き続き、公務を補助するための団費職員の雇用により教員の負担軽減を図る。

2	学習指導	<p>④主体的に学習に取り組む態度を育成し、授業第一主義及びタイムマネジメントを徹底させながら、学力の向上を図る。</p>	<p>○授業第一主義のもと、予習、復習、課題に取り組み、家庭学習時間を習慣化させる。(1年・2年・3年) [1年家庭学習：平日150分、休日4時間以上] [2年家庭学習：平日150分、休日270分以上] [3年家庭学習：平日270分、休日8時間以上] ○学習時間調査や成績分析、面談を行うとともに、教科担任、部活動顧問、家庭との連携を密にし、一人ひとりの生活実態を把握しながら、効果的な学習指導を行う。(1年・2年) ○授業変更を行い、可能な限り自習をなくすことで授業で学ぶ環境をつくる。(教務) ○年間行事予定及び月別行事予定を提示することで、見直しをもって計画的に学習に取り組めるようにする。(教務) ○各教科ごとに校内研究授業を行い、生徒の学習意欲向上や主体的に学習に取り組む姿勢の醸成について研究する。(教務) ○予習、復習を徹底して授業に臨ませるとともに、「授業第一主義」の趣旨を十分理解させ、授業の中で考え学ぶ姿勢を維持させる。(理数)</p>	<p>・学習時間の数的目標には届かない部分もあったが、個々に対し効果的な指導を行った。(1年) ・学習時間調査を5回行った。(2年) ・調査前の学習時間は一日300分前後であった。調査前の調査結果以外でも学習時間の確保ができていたか、面談等で把握する必要がある。自己管理がなかなかできない。(3年) ・先生方の協力のおかげで、円滑な時間変更を実施することができた。自習をお願いしなければならないところもあったが、概ね順調に授業を進めることができた。(教務) ・コロナ禍で行事の中止や縮小、日程の変更を余技されたものもあったが、概ね計画どおりに実施することができた。(教務) ・各教科ごとに校内授業研究を行い、教授法や授業の展開の仕方について研究を進めた。(教務) ・予習、復習は十分とは言えないが、授業の中で考えようとしている生徒は多い。(理数)</p>	B	<p>●何のために家庭学習が必要なかを浸透させる必要がある。(1年) ○担任のみならず、教科担任・部活動顧問等の協力を得て個々の指導にあられた。(1年) ●学習時間はやや増えたものの、目標時間には達しなかった。(2年) ○調査前は数値目標を超えているが、通常時についても継続できているかについては注視していく必要がある。(3年) ●「南高手帳」の活用については、不十分などころが多かった。自己管理や計画の立案など本校生徒が苦手とする点である。(3年) ○自習をお願いする場面もあったが、概ねオーダーどおりに時間変更を実施することができた。(教務) ●担当者のチェックミスで、使用教室の重なりや、生徒への連絡ミスがあった。今後は、チェック体制の仕方について再度の確認が必要である。(教務) ○学年通信等で月歴を提示していただいたことや手帳の使用により、スケジュール管理を意識することができた。(教務) ○校内研究授業を行い、指導の仕方について情報を共有し、指導力の向上を図った。また、授業評価の結果をフィードバックし、授業へ反映させた。(教務) ○授業の中で考える姿勢が見える。(理数) ●予習、復習にしっかり取り組ませる。(理数)</p>	<p>・家庭学習・学習時間の確保については、本授業との関連を図りながら進めるとともに、各生徒がやるべき自己管理計画の目標と実施事項を具体的に書き出して、達成する毎の一つひとつ、つぶして行き、実行性を可視化することが有効と思う。 ・授業の評価について、教職員・生徒・保護者に若干の温度差があるように思われた。授業第一主義ということは、教師も生徒も、一つひとつの授業を大切にすること。これからも教職員相互に協力して、授業改善に取り組んでいただきたい。 ・2年生の学習時間は、「やや増えたが目標時間に達しなかった」とあるが、大学受験までと1年という時点でこのような意識では非常に心配である。学年全体で、1年後を見据えてどのような学習をしなければならないか真剣に考えてほしい。</p>	<p>・授業第一主義を継続するなかで、授業において「学びの本質」を身につけさせ主体的に学習に取り組む態度を育成する。 ・生徒1人1台端末等を活用することにより、個別最適化した学力育成方法を模索する。 ・生徒のタイムマネジメント力を向上させ、学習時間確保により学力向上を図る。</p>
		<p>⑤文章や情報を正確に読み解く力を養い、主体的、対話的で深い学びを通して、思考力・判断力・表現力を養成する。</p>	<p>○昨年度実施された大学入学共通テストを見据えた文章読解力を養い、実践を意識した授業を実践する。(1年) ○高大接続改革に対応し、グループワークや探究的活動を通して、文章を正確に理解し、自分の考えを明確に表現する力を養う。(2年) ○大学入学共通テストを見据えて文章や情報を正確に読み解く力を養い、主体的・自律的に学習励む態度を育成する。(3年) ○研究授業や授業見学週間を活用して他教科等の指導から学び、より質の高い指導力を身に付ける。(教務) ○主体的、対話的で深い学びとなる課題研究を通して思考力・判断力を、また発表を通して表現力を養成する。(理数)</p>	<p>・朝読書を行い、生徒の読解力向上に努めた。(2年) ・例年通り各教科で研究授業を実施していただき、指導力の向上につなげた。(教務) ・一人一人が考え、試行錯誤を繰り返す中で思考力・判断力が高められた。また、研究発表で回を重ねるごとに表現力が磨かれた。(理数)</p>	B	<p>○生徒たちは真面目に取り組み、読解力の向上、読書への興味が高まったのだと思う。(2年) ○他教科の授業やICT機器を活用した授業を参観することで、いろいろな授業展開の方法や新しい教授法について研鑽を深めた。(教務) ●忙しい中時期での参観だったこともあって、昨年よりも参観した教員が減少した。(教務) ○研究過程、発表を通し、思考力・判断力・表現力がある程度高めることができた。(理数)</p>	<p>・ICTの活用も大切だが、学習成立のポイントは、生徒の五感に訴え発見に気づき、驚きといった感情を揺さぶることと考える。 (例えば、技術科教育では、視覚・聴覚・触覚・臭覚・味覚を働かせ、実践的体験的な学び(問題解決学習)「百聞は一見に如かず。百見は一試に如かず」が柱である。) 「自らの将来像」について考える場合でも、例えばOBの講話や実体験など、できるだけ具体的な道筋が見えるような工夫が必要と思う。</p>	<p>・研究授業や授業見学週間の設定、生徒の発表機会などを通し、生徒の思考力・判断力・表現力の向上を図る。 ・ICTの活用や生徒の五感に訴える授業を行い、各教科で文章や情報に関する読解力を育成する。</p>
		<p>⑥新教育課程における「総合的な探究の時間」の課題探究実践、観点別評価についての研究を進め、令和4年度4月には提示できるようにする。</p>	<p>○「総合的な探究の時間」並びに研修旅行を活用し、主体的に学び、探究する方法を身に付けさせ、グローバルな視点とコミュニケーション能力を養う。(1年・2年) ○最新の高大接続改革の動向を踏まえ適切に対応し、手帳や総合的な探究の時間等を活用した志望理由書や調査書の作成を通じて、生徒の進路意識を高めさせる。(3年) ○「総合的な探究の時間」の課題研究が行えるように授業計画の整備を行う。観点別評価に伴うシラバスや校内規定の更新を実施する。(教務) ○「観点別評価」については、12月末に令和4年度入学学生のシラバスを完成させるべく、教科主任会・各教科会を充実させ、説明責任が果たせる評価システムを完成させる。(総合企画) ○1年次普通科の課題研究活動においては、「山形(やまがた学)」という大テーマを設け、大学など外部と積極的に連携しながら、様々な視点で生徒自身の探究活動を高める支援を行う。(総合企画) ○1年次の「総合的な探究の時間」に、次年度に向けた課題研究準備講座を適宜組み込み、探究活動の基本を身につけさせる。(理数)</p>	<p>・「総合的な探究の時間」が新たなステージに入り、様々な取り組みの中で、大きな成果を上げることができた。(1年) ・国内に変更になった研修旅行で、東北・北海道の歴史や文化を学ぶことが出来た。(2年) ・「総合的な探究の時間」を活用し、SDGsを中心に取上げ社会貢献や課題解決の意識を醸成し積極的に学ぶ姿勢を養った。(3年) ・年間を通して総合的な探究の時間が円滑に進むように授業配置を行った。(教務) ・観点別評価に伴った教務規定を作成中であり、令和4年度から実施できるように進めている。(教務) ・1年生については、夏に外部講師を招いて探究に関する講演を行い、2学期から9つのゼミグループに分かれて課題研究活動を行った。1月末に発表用スライドを完成させ、各ゼミ内での発表を経て、2月7日に外部講師を招いて各ゼミ1班ずつ発表会を行った。(総合企画) ・13回にわたる準備講座を開講し、課題研究の基礎および理科実験の基本を学ばせた。次年度に所属する分野およびグループ分けができた。(理数)</p>	B	<p>○積極的なICTの活用と、担任団のみならず総合企画課の絶大なご協力によるところが大きい。(1年) ○クラスの枠を超えた班編成により、コミュニケーション能力を養う機会が得られた。(1年) ○中尊寺やねぶた、五稜郭など、国内の、特に自分の住む東北・北海道地方の歴史・文化を改めて触れ、研修することができた。(2年) ○志望理由書作成や調査書記載内容へ幅を広げることができた。生徒の進路意識を高め、自分の興味関心と社会との関りを考えることができた。(3年) ●自らの将来像へと深く考察するまでにはいたらなかった。(3年) ○「総合的な探究の時間」の年間計画に従い、課題研究を実施し問題点も整理できた。次年度実施に向けて計画的に進めていく。(教務) ○観点別評価に合わせて、通知票の整備や教務規定の更新を行い、新年度から実施する準備ができた。(教務) ●教務規定等の確定が遅れているため、新年度の生徒・保護者向けの説明について急いで準備を進める。(教務) ○他校の事例を参考にして、課題研究発表までのおおまかな指導を行ったものの、基本的には生徒の自主的な活動に委ねる部分が多かった。様々な工夫を凝らした発表も多く、生徒の探究への意識は確実に高まったと思われる。(総合企画) ●指導計画を一から立てなければならないなど、担当者の負担が相当大きかった。次年度は外部の教材などを積極的に活用し、また総合企画課専任を中心とした指導計画を整えたい。(総合企画) ○課題研究の意義など、基礎を固めることができた。(理数) ●研究のテーマ設定にはまだ時間を要する。(理数)</p>	<p>・「総合的な探究の時間」の課題研究については、発表会の機会を共有化し、本人はもとより、他者や後輩たちにも活かす工夫が必要と思う。そして、研究成果や課題については、南高の探究実践の成果財産として、繋いで行くこと良いと思う。 ・探究型学習について、テーマ設定や学び方の進め方は、世の中には、こんな事がある、こんな人がいるというヒントを与えるのがいいと思う。それってどういう事？そんな人みたいになりたいな、と興味を湧けば積極的に取り組めるのではないか。発表会やプレゼンテーションなどは、賞を取った人をまねるのが近道と心得る。良いお手本から始めて、自分らしいものへ作り変えていければいい。 ・方策に「コミュニケーション能力を養う」とあるが、プリントに記載されている内容では、どの様に能力を伸ばすのかがよくわからない。なかなか難しい指導とは思いますが、生徒達が社会人として生きていく上で大切な能力になるので、今後の重要な課題の一つとして取り上げてほしい。</p>	<p>・新教育課程の円滑な運用を心掛け、PDCAサイクルによる問題点のチェック機能を充実させる。 ・新学習指導要領の実施にあたり、多面的な観点別評価に関する具体的な実施を進め、評価手法と手順を確立させる。 ・総合的な探究の時間における課題研究の指導に関して、教科横断的で組織的な全校規模の指導体制の構築を進める。 ・課題研究の実施に当たり、地域課題を取り上げる段階から、課題解決を図る段階へ深化させる。</p>

3	進路指導	<p>⑦盤石な学力を基盤としながら、情報化・グローバル化など変化の激しい時代に求められる資質・能力を育成する。</p>	<p>○ICTを活用した情報収集や様々な学問・研究に触れさせることで、先を見通し、社会が求めるものを創造していくチャレンジ精神と行動力を育む。(1年・2年) ○朝読書を通し、視野を広げ、自己や他者を理解する力を養う。(2年) ○学習時間調査や進路希望調査を行い、教科担任、部顧問、家庭との連携を密にし、面談等を通じた生活実態の把握に努め、学力の向上に向けた様々な指導を行う。(3年)</p>	<p>・「グーグル・クラスルーム」やタブレットをはじめとするICTを積極的に活用できた。(1年)</p>	B	<p>○「総合的な探究の時間」の学習活動は、生徒のみならず教員も新たな可能性を実感できた。(1年)</p>	<p>・コロナ禍で、各種体験活動・研修会・連携事業の中止等、大きな影響を受けたので方策等すべて達成とはいかなかったものの、今後の指導に向けて成果と課題について適切に分析されていると思う。 ・コロナ禍に対して、前年度のような手探りででの対応でなく、ICTの導入など一歩進んだ態勢づくりをしている点は、良いことだと思う。今後は、習熟度を高め十分に活用して、対面で足りないコミュニケーションを補っていければ良いと思う。</p>	<p>・今年度コロナ禍で実施できなかったエンバウメントプログラムを実施し、グローバルな視点と高い自己肯定感を育成する。 ・生徒1人1台端末を有効に活用し広く学問・研究に触れることで、情報活用能力や先を見通す力を育成する。</p>
		<p>⑧広い視野と高い志を育成し、国公立大学や難関大学への挑戦意欲を喚起しながら、生徒一人一人の自己実現に向けたキャリア教育を推進する。</p>	<p>○個別面談を通して、生徒一人ひとりの進路目標や適性を踏まえ、適切な文系・理系のコース選択を指導する。(1年) ○個別面談を通して、生徒一人ひとりの進路目標を具体化させ、定期考査と模試を学習のベースメーカーに進路と学習に対する意識づけを強化する。(2年) ○平常講習等や蔵王学習合宿を実施し、志望校合格に向けた盤石な学力を確立し、最後まで粘り強く努力する態度を育成する。また、国公立大学140名以上、難関大学20名以上を目指して、生徒一人一人の自己実現に向けた適切な進路指導を行う。(3年・進路) ○大学入学共通テストにおいては、900点満点中630点以上の平均点獲得を目指す。(進路) ○「1年職業講話」「各学年進路講演会」などを実施し、意識の高揚に努める。(進路) ○希望者に対し、「医師体験」「看護士体験」「理学療法士・作業療法士体験」などに積極的に参加する。(進路)</p>	<p>・適正文理選択の結果となった。(1年) ・面談週間や模試の分析、学問分野などの研究を行った。(2年) ・朝読書を行い、生徒の読解力向上に努めた。(2年) ・進路講演会をZOOM配信で行ったり、蔵王学習合宿も講義をせずに密を避けて実施するなど、コロナ対策をしながら実施できた。学年集会やLHR、激励会や出陣式も同様に工夫しながら実施できた。制限が多い中、生徒の意欲を最大限高めることができた。(3年) ・大学入学共通テストに関しては、全国的に大幅な難化傾向にある中で、文系543点(60.3%)・理系517点(57.4%)の得点をあげることができた。(進路) ・職業講話及び進路講演会に関しては予定通り実施することができた。(進路) ・医師・看護師・理学療法・作業療法体験に関しては、コロナ禍の影響で残念ながら実施中止となった。(進路) ・8/2~4の実施予定を3/24~26に延期したが、結局中止した。(理数) ・2年生対象に筑波研修の代替研修として「県工業技術センター研修」、「山形大学理学部セミナー」を実施した。(理数)</p>	B	<p>○担任面談のみならず教科担当者などが機に応じて面談を行い、学年全体として「ブレ」のない細やかな個別指導を行うことができた。(1年) ○担任面談や模試の分析、学問分野などの研究を通し、進路目標を明確なものにしていくのに役立てた。(2年) ●上位層が育たず、難関大・医学部医学科の出願数が伸びなかった。(3年) ○知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力が試された大学入学共通テストだったが、粘り強い生徒・教員の取り組みにより、県内でも上位の結果を残すことができた。(進路) ●今後も同傾向の試験が続くと思われ、探究活動や体験活動、各種講演会などを通して、主体的な学びやキャリア教育の必要性を高めていきたい。(進路) ○筑波研修の代替研修は、十分とはいえないまでも最先端技術を見聞する良い機会となった。(理数) ●コロナ禍で不安定な状況が続く以上、代替研修の検討を深める必要がある。(理数)</p>	<p>・自己理解や職業理解を進め、将来の自分の生き方・あり方を考え、ここでの学習に結び付けられるような指導が一層必要と思う。 ・考えをまとめ判断し実行できるためには、手持ちのカードに何があるのか、何が不足しているのか、自己の価値観に照らして優先順位をどのようにつけるのかなど、問題解決モデルの理解も重要と考える。 ・ウィズコロナ、アフターコロナの社会では、スマホをはじめとするツール、コンテンツとしてのアプリの使用は当たり前ものとなっていくだろうから、柔軟な対応が今後さらに必要と感じる。</p>	<p>・大学入試改革の動向をとらえながら、生徒の進路目標実現に必要な力を身につけさせる。 ・キャリア教育の観点から将来の進路目標に対する効果的な意識づけを行い、学力養成と車の両輪を成す進路指導を行う。 ・新旧3学年情報交換会などの職員研修の機会を通じて、先輩学年の進路成果のノウハウを継承し、次の指導に生かしていく。 ・自己理解や職業理解を進める中で自己の可能性を育て、難関大学に挑戦する意欲を喚起する。 ・コロナ禍の中で状況が許す限り、体験活動等の実施を模索する。</p>
		<p>⑨高大接続改革への万全な対応と、県内大学等との連携充実を図る。</p>	<p>○高大接続改革を見据えて、南高手帳や「G-ワークスペース」を活用し、生徒のキャリア育成に資するとともに、最新の改革動向を踏まえて適切に対応する。(1年) ○高大接続改革を見据え、手帳やポートフォリオ等を活用し、大学で学ぶ力や社会で生きる力を伸ばす。(2年) ○最新の高大接続改革の動向を踏まえ適切に対応し、手帳や総合的な探究の時間等を活用した志望理由書や調査書の作成を通じて、生徒の進路意識を高めさせる。(3年) ○大学入学共通テスト等、新しい大学入試制度への対応について、引きつづき研究を進め、必要な職員向け研修会にも参加する。(進路) ○県教委「地元大学進学促進セミナー」への参加を積極的に促す。(進路)</p>	<p>・手帳やポートフォリオの利用は十分とは言えない。(2年) ・「南高手帳」の活用については、春に活用方法を示して以来不十分なところが多かった。(3年) ・令和7年度大学入学共通テストに導入予定の「情報1」への取り組みについて、県進連を通じて調査を行った。(進路) ・「地元大学促進セミナー」は、2年生の参加は無く、1年生も6名希望していたが、結局事業が中止となった。(進路) ・昨年度同様、各学年1回ずつではあったが山形大学の栗山先生に出席講座の形でお願いをし、開講することができた。(理数)</p>	C	<p>●紙の手帳の利用と電子媒体の利用との使い分けにやや苦労した。(2年) ●自己管理や計画の立案など本校生徒が苦手とする点である。(3年) ●「情報1」に関しては、まだ大学入学共通テストへの指導方針が定まっていない。情報科担当・教務課と連携して2年履修→3年受験対策という切れ目のない指導体制を整える必要がある。(進路) ●地元大学への魅力について、今後とも様々な形で発信してゆく必要がある。(進路) ○実験することの意義や条件設定の重要性など課題研究につながるポイントを学ばせることができた。(理数) ●山形大学理学部でのセミナーの恒例化を検討する。(理数)</p>	<p>・高大接続改革については、言葉は耳にするが具体的な取り組みが分からないため、生徒や保護者への情報提供を丁寧に行っていただきたいと思う。 ・「進路指導の満足」「進路情報の提供」については、昨年度同様にコロナ禍の不安が反映されていると考えられるが、生徒・保護者のニーズにあったきめ細やかな情報提供内容と生徒・保護者の立場に立った丁寧な説明が求められると考える。</p>	<p>・引き続き大学入試の変化に対する情報収集を確実に進め、的確に対応できる進路指導を進める。 ・生徒や保護者のニーズを把握しながら、効果的な進路指導を進めていく。その際、情報の発信という点にも配慮する。 ・地元大学との連携などを充実させ、キャリア教育を一層強固なものにする。 ・状況を見極めながら、セミナーや研修会等を臨機応変に実施する。</p>

4	生徒指導	<p>⑩自治的な生徒会活動と活発な部活動を奨励しながら情熱や粘り強さを涵養し、多様性の理解を促しながら自他を尊重しあう集団づくりを行う。</p>	<p>○部活動や生徒会活動への積極的参加を促し、自主自律の精神を育てる。(1年) ○部活動や生徒会活動において中核となる自覚を促し、自主自立の精神を持って活動できるようにする。(2年) ○最高学年として部活動や生徒会活動に積極的に取り組ませることで、多様性を理解させながら最後までやり遂げる責任感を育成する。(3年) ○本校部活動方針に基づき、各種大会での上位入賞・全国大会出場を目指す。コロナ感染予防対策を立てながら、合理的、効果的、効率的な活動を追求し、学習との調和に努める。(生徒) ○自主的、積極的な生徒会活動を実践させ、互いを尊重、協力する姿勢と自他の命を大切にすることを育てる。(生徒)</p>	<p>・感染症による情勢でやむを得ないが、様々な生徒会活動が中止や変更を余儀なくされた。(1年) ・部活動、生徒会活動共に、南高の中核としての役割を担い、活動している。(2年) ・コロナ禍で部活動が制限される中でも悲観することなく大会に向けて前向きに取り組み、全てを出し切ることができた。特に6月の切り替え後の全国大会等での生徒の活躍は、南高健児としての士気を高めるものとなった。(3年) ・昨年に引き続き「今できること」を考え、主体的な生徒会活動を行い、学校祭などの各種行事を取組み実践することができた。また略服についても見直しを図り実践できている。(生徒) ・インターハイには、弓道・陸上・バドミント・ボクシング・レスリングが出場。全国選抜大会で弓道・JOC杯レスリング(大会は中止)・ボクシングが全国選抜への出場が決まった。また三重国体は中止になったが、バレー・ボクシングが出場権獲得。全国高総文祭には、文芸・写真・囲碁が参加。文芸は全国高校文芸コンクールで文芸部誌部門と詩部門で優秀賞を受賞し、全国の舞台で大活躍をした。コロナ禍で、部活動に対する情熱が下がり気味の中、「部活動は南高生の元気の源」、文武両道で頑張る姿や、礼儀、挨拶、ボランティアなどへの取組みなど、熱心な顧問の先生方のご指導の下、すばらしい活躍であった。(生徒)</p>	B	<p>●生徒間の「縦・横」の繋がりを作る(学ぶ)機械が減少したことは残念であった。(1年) ○部活動、生徒会活動共に、南高の中核として積極的に活動する姿が見られる。新人戦では多くの部が好成績を取めた。(2年) ○生徒会活動では大きな制限がある中、応援練習や学校祭において臨機応変に新しい発想で取り組み、後輩に気概を示すことができたのではないかと思う。(3年) ○新しい生活様式の中、南高祭、クラスマッチなどの取組みや、略服の見直しなどは、チーム意識を向上させ「誇り」を高め、自主的、積極的な生徒会活動により責任と協調性が身についた。(生徒) ○生徒会、各種委員会で、生徒会報「コバルト」を通じて広報しながら活動することができた。(生徒) ●本校の部活動方針のもと、熱心な各部顧問の指導を、より合理的、かつ効果的に取り組んでいく必要がある。(生徒)</p>	<p>・部活動は、コロナ禍で、今年度も大変難しい状況であったと拝察する。その中であって、運動部・文化部ともに、積極的にチャレンジして、それぞれ結果を出してくれたことは、素晴らしいことだと思う。 ・コロナ禍で制限される中、「今できること」を考えて、種々の部活動や生徒会行事が実践でき、成果が得られたことは自他を尊重しあう集団づくりそのものであり、素晴らしいことだと思う。</p>	<p>・「文質彬彬たる社会のリーダーの育成」という本校の目標実現に向けて、教職員間の連携・協働をより深めて生徒指導にあたる。 ・職員定数減という状況の下、本校の部活動方針を周知し、方針に基づいて、部活動のより合理的・効果的な取組みを行う。 ・コロナ禍の中、感染防止対策ガイドラインに従って「何ができるのか」を明確にしながら、生徒の主体的な活動を支援していく。</p>
		<p>⑪学校全体でいじめ防止に取り組むとともに、読書やボランティア活動を奨励し、道徳心や公共心を醸成する。</p>	<p>○面談週間やホームルーム活動を活用し、生徒理解と生活実態の把握に努め、充実した学校生活を送れるよう配慮する。(2年) ○出張図書館(3年、職員)や図書委員の広報活動を行い図書館利用の促進を図り、読書活動を促し公共心を育成する。(教務) ○校内読書感想文コンクールを実施し、読書の奨励を図る。(教務) ○「いじめ・非行をなくそう」県民運動を踏まえ、生徒会によるスローガン等を作成し、主体的に取り組ませる。(生徒) ○生徒会や部活動、クラス単位でボランティアに取り組み、地域や社会の中で交流する場を積極的に設け、奉仕の精神や道徳心を育む。(生徒)</p>	<p>・面談週間(3回)を行い、生徒理解に努めた。(2年) ・出張図書館を3年生の教室に設置し、読書活動の啓蒙を行った。(教務) ・校内読書感想文コンクールを行い、優秀な作品を各読書感想文コンクールに出品した。(教務) ・地元町内会と連携を図り、学校周辺の除雪に、クラス単位取り組んでいる。(生徒) ・「いじめ・非行をなくそう」スローガンを作成し、本校いじめ防止基本方針とともに生徒へ周知しながら未然防止を図ることができた。(生徒)</p>	B	<p>○各担当が進路志望や普段の生活、悩みなど、生徒をより深く理解することにつながった。(2年) ●出張図書館を開設したが、図書の選定でクラス間に差が出て、貸出数に影響した。(教務) ○校内読書感想文コンクールの作品をYBC本の森探検、地区読書感想文コンクール等に出品した。(教務) ○部活動単位やクラス単位での積極的なボランティア活動は高く評価できる。コロナ禍の中で校外での活動が思うようにできなかった。(生徒) ○いじめの察知した段階で組織的(小委員会)に対応することができた。(生徒)</p>	<p>・「いじめがなくてよい、部活と勉強に大変満足」という保護者の言葉から、大部分の保護者というのは学校を支えてくれる応援団であると感じた。これからも、自信と誇りを持って山南高の名前を世の中にアピールしていただきたい。</p>	<p>・本校のいじめ防止基本方針に基づき、学校全体で組織的に未然防止と早期発見・早期対応に努め、いじめの根絶を目指す。 ・今後も積極的にボランティア活動を進め、生徒の主体的な取組みをさらに促していく。 ・生徒の読書活動の活性化を目指し、図書館の活用について工夫を図る。 ・定期的な面談に加えて、生徒の小さな変化に速やかに対応するために、日常的に教職員間の情報共有を確実なものにする。</p>
		<p>⑫自己肯定感を高めるとともに、自己管理能力の養成と教育相談の充実により、生徒の心身の健康保持に努める。</p>	<p>○南高手帳や「G-ワークスペース」を活用し、自己管理能力を高め、基本的な生活習慣を早期に確立させる。また、自他を尊重し、高めあう集団を育成する。(1年) ○手帳やポートフォリオを活用し、自己管理能力を高め、生徒自身の主体的な学びや人間的な成長を促す。また自他を尊重し高めあう集団を育成する。(2年) ○教育相談委員会や養護教諭、SCと協力・連携しながら、疾病を持つ生徒や学校不適應・不登校の生徒に早期に対応し、心身の健康に関する問題の解決に努める。(2年・3年・生徒) ○非行行為の皆無、いじめや盗難のない安心・安全な学校環境づくりのために、「我等の心得」に則り、南高生としての自覚と誇りを持ち、自主的に自律した活動を奨励する。(生徒)</p>	<p>・「グーグル・クラスルーム」の活用に絞り、南高手帳は活用しなかった。(1年) ・グーグルクラスルームを用いて、さまざまな連絡以外にも課題の配布・回収などを行った。(2年) ・特別支援の生徒卒業認定(3年) ・交通事故件数は昨年度より減少した。(16⇒11)大きな事故にはなっていないが今後も0件を目指す。(生徒) ・不登校傾向、配慮が必要な生徒との生徒間のトラブルに対して、担任、学年、養護教諭、SC等連携しながら対応できた。(生徒)</p>	C	<p>○同じ目的のために、複数手段があったが1つに集約されたことにより、生徒・教員双方にメリットとなった。(1年) ●手帳を用いて自己管理能力を高めるのことに努めたが、クラスによって差があり、十分とは言えない。(2年) ○特別支援の生徒1名については3年間保健課、学年、教科担当者、家庭と緊密に連携しながら特別支援計画にもとづき手厚く支援及び合理的配慮をいただいた。(3年) ●特別支援3年間を見通した体制の確立(3年)</p>	<p>・面談活動を通して、きめ細やかな指導がされている点が評価できる。 ・コロナ禍の中で意外な生徒の中に表面化していない精神的な不安の表れがあることも予想される。普段から担任やSCとの教育相談をまめに実施し、不安を小さくしていくことが必要だと考える。</p>	<p>・配慮が必要な生徒に対して適切な支援・指導を行うため、学年・生徒課・保健課の情報共有・連携を進める。 ・不適應傾向の生徒について、学校全体で共通理解を行い、スクールカウンセラーの協力を得ながら組織的対応を進める。 ・生徒の状況等を勘案しながら中学校とも連携をし、組織的に支援を行う。また、必要に応じて「個別の支援計画」を作成し、計画的な支援を行う。</p>

5	その他	<p>⑬新型コロナウイルス感染症対策や事故の未然防止、事故等発生時における的確な対応など、安全教育・安全管理の取組を推進する。</p>	<p>○手洗い・うがい・マスク着用など新型コロナ感染症予防対策を徹底させるとともに、生活リズムを整えさせ、健康管理、維持・増進に努めさせる。(1年・2年・3年) ○登下校の安全指導と自転車の運転マナーの指導を徹底する。(1年・2年) ○新型コロナウイルス感染症に関する通知に従い、適切な授業計画及び運営を行う。(教務) ○定期的に安全点検を行い、事務室と連携し、危険箇所を修繕する。(総務) ○『さくら連絡網：健康チェック』の活用により、生徒の健康状態を把握して感染症等を未然防止し、また、手指消毒、マスク、手洗い、消毒、教室の換気等を励行する。(保健) ○校内外の点検等により学校事故の根絶、安全点検の徹底を図る。(保健)</p>	<p>・感染症予防対策の徹底に努めてきたが、数名の罹患患者や濃厚接触者が出たが、拡大に至らず良かった。(1年) ・登下校の安全・交通マナーを、学年集会を通して、また日ごろから呼びかけた。(2年) ・受験生の自覚の元、学校生活では感染予防を徹底した。(3年) ・新型コロナウイルス感染症により授業が行えなくなることを想定してリモート授業等の実施の仕方について基本的な姿勢を作成した。(教務) ・危険箇所の修繕については、速やかに技能員に確認してもらい対応している。(総務) ・感染症対策として『さくら連絡網：健康チェック』の活用や各掃除箇所への「消毒グッズ」を設置。(保健) ・熱中症対策としてAED講習会や各部へ熱中症計配布、また保健日よりなどにより大きな学校事故を防ぐことはできた。(保健)</p>	B	<p>●感染力の強さを改めて実感するとともに、さらなる対策強化と継続の必要性を感じた。(1年) ○自転車事故は4件だったが、大きな事故にはつながらなかった。(2年) ●コロナ禍の中で受験体制と体調管理のバランスに苦慮する生徒が多かった。(3年) ○学級閉鎖や学年閉鎖に備え、リモート授業を実施するための準備ができた。(教務) ●設備が古くなって根本的な改修が必要な部分が増えている。(総務) ○感染症対策として、各掃除場所へ消毒グッズや消毒液の設置により対策ができた。また、新型コロナウイルス感染症対策費により、非接触型体温計の設置や消毒噴霧器に十分な対応ができた。(保健) ○昨年と比較してAED講習の職員参加率が高く、安全対策向上がみられた。(保健) ●さくら連絡網「健康チェック」の生徒への実施徹底、感染予防行動の実施と意識の向上(保健)</p>	<p>・感染症の予防・事故の未然防止、学習環境の整備、情報発信等について、概ね達成されていると思う。 ・リスクマネジメントは、学校側だけが行うのではなく、リスクの実態や課題を共有し、生徒自身がリスクマネジメント力をつけることも必要と思う。 ・終わりが見えないコロナ禍にあって、生徒の健康と安全を確保しながら、生徒たちを励まし、指導された南高の教職員の方々に、深く感謝と敬意を表したい。</p>	<p>・新型コロナウイルス感染症対策のための「新しい生活様式」を踏まえた学校運営を徹底する。 ・学校安全の日を中心に、校舎内外の定期的な巡回を行って危険箇所の発見・対処に努め、事故の根絶を期す。 ・事故の未然防止と事故発生時に的確な対応が取れるよう安全教育・安全管理の取組を進める。 ・警察や家庭・地域との連携と生徒会の交通安全活動を通して、交通安全指導を推進する。</p>
		<p>⑭校舎内外の清掃・美化を徹底するとともに、学習環境の整備を図る。</p>	<p>○教室等の環境整備を徹底して、学習に集中できる清潔な環境づくりに努めさせる。(1年・2年・3年) ○事務室と連携を図りながら、校内諸施設・備品の整備・充実を図る。(総務) ○ゴミを持ち込まない・持ち帰る指導を徹底し、安全で清潔な環境づくりを進める。(保健) ○毎日の清掃指導と点検、清掃強調週間による徹底を図る。(保健)</p>	<p>・良好な状態を保つことができた。(1年) ・随時、教室・廊下の環境整備を心掛けた。(2年) ・事務室と連携を図り校内の施設・備品の整備を適宜行った。(総務) ・各学年での指導により、HR教室や廊下はきれいな状態を保つことができた。(保健)</p>	B	<p>○自転車事故は4件だったが、大きな事故にはつながらなかった。(2年) ○入学当初から指導し、特に教室・廊下の下部に私物を置かないことが常態化している。(1年)</p>	<p>・学校施設設備については、昨年度のマイナスをプラスに転じさせ、生徒・保護者の満足度が高まって安心ではなかったか。さらに、生徒の安全安心を考えた営繕管理が大切になると思われる。</p>	<p>・新型コロナウイルス感染症対策としての換気や消毒等を引き続き徹底する。 ・環境美化の意識をさらに高め、施設設備の維持・保全に努める。 ・県との連携の下、優先順位を明確にしながら、施設・設備整備の要望を行い、改善を進める。</p>
		<p>⑮積極的な情報発信と学校評価活動による開かれた学校づくりに努める。</p>	<p>○「さくら連絡網」や学年通信の発行を通して生徒の学校生活と各種情報を提供し、保護者との連携を密にして共通理解を図る。(1年・2年・3年) ○状況が許す範囲の中で学年PTA・保護者対象の講演会を開催し、連携を強化する。(1年) ○学年PTA・学級懇談会・保護者対象の講演会を開催し、連携を強化する。(2年・3年) ○学校説明会及び中学校における学校紹介を行い、入学希望者に対して適切な広報活動を行う。(教務) ○南高ブログの管理を適切に行う。(総務)</p>	<p>・感染症対策の為、4月の学年PTA総会、7月の進路講演会以降、個別の3者面談意外には対面の機会がなく、保護者との信頼関係を築く上で大きな痛手であった。(1年) ・学年通信を2月現在で20号発行し、保護者に学校の様子を伝えることが出来た。(2年) ・進路講演会を2回行い、入試状況や学習のアドバイスを保護者・生徒に行った。(2年) ・日常的なさくら連絡網の活用。学年通信の発行13号(3年) ・学校説明会を実施し、中学生とその保護者に向けて本校の学校生活を紹介した。(教務) ・南高ブログの更新を適宜行った。(総務) ・行事のたびに「南高ブログ」を更新し、理数科の活動状況を内外へ発信することができた。(理数)</p>	B	<p>●対面がかなわない中で、保護者との信頼関係を築くための方策を講じる必要がある。(1年) ○教室での学級懇談会を行うことができた。(2年) ●それはあくまで全体的で、短時間で、学級PTAなど、保護者の声をもっと聞く機会があればと改めて感じた。(2年) ○さくら連絡網は、生徒を介さず直接保護者と繋がるため、重要な連絡が届かないことがなくなった。コロナ禍で直接保護者と会う機会が少なくなった中、こまめな連絡が可能であった。(3年) ○学校の様子が伝えやすくなった。(3年) ●学校説明会には、生徒、保護者、中学校関係者合わせて延べ811人参加者があった。説明会の編成や説明の仕方など、他校に劣るとの参加者アンケート得たため、改善に努めたい。(教務) ○理数科専任の中での業務分担が機能し、タイムリーな情報発信ができた。(理数)</p>	<p>・コロナ禍で、教職員が直接保護者と会う機会が少なくなった中では、さくら連絡網や学年通信等の情報共有手段は益々重要である。しかし、保護者が子どもの活動や学校生活を直接見たり感じたり、対面での懇談を通して担任教師と直接繋がることはさらに重要な基本として、厳しい中であっても、常に実施方法を工夫・検討していくことが大切と思う。 ・アンケート調査において、生徒の「南高に入ってよかった」、保護者の「入学させてよかった」の評価がどちらも80%以上は高く評価されると思う。 ・アンケート等を通して、生徒も保護者も「良い学校にしたい」との共通目標に向かって協力することが大切だと感じる。 ・アンケートの自由記述に書かれた意見は、強い思いがある方の意見・要望なので、可能な限り取り上げていただければと思う。(理数)</p>	<p>・さくら連絡網を活用したタイムリーな情報発信に努め、コロナ禍における本校の教育活動に対する理解を深化させる。 ・保護者と学校間で、常に相互的な連絡のやり取りができるよう方策を講じる。 ・本校ホームページの適切な更新を行い、学校から積極的な情報発信を行う。 ・学校評価アンケートの結果をPDCAサイクルの中で確実に生かし、開かれた学校づくりに努める。</p>